



「油一」ウルトラマリン ブルー

## 絵具の性能試験。

「理想的な油絵具」の研究と開発に向かって、私たちホルベイン工業と東京芸術大学油画技法材料研究室がまず始めたのが、いま市場に出ているさまざまな油絵具のテストでした。使用頻度の高い14色それを13種類の塗り見本で、3種類の下地に塗るという、合計546枚の少し気の遠くなるような試験。我々はこれを「官能評価塗布試験」と名付け、「外観」「諧調」「描画」「混色」「表現」の五項目の視点から評価してきました。いわば、絵具の描き心地を客観化していく作業とでもいえましょうか。しかもこれは第一次試験でしかなく、このあと二、三次と回を重ねる中

で次第に形になつていったのが、今度の新しい油絵具「油一」でした。発色がよく鮮やかで、亜麻仁油をベースに練り合わせたものであり、硬質に固まって乾燥する。肌理が細かく、粘着性が高く、画面に吸い付くような塗りになる。という特徴を持つた絵具として誕生することになったのです。このことは取りも直さず、本来の油絵具そのものの特徴であり、いわば原点に戻りながらも、現代でしかできなかつたことだといえるでしょう。

※「油一」(全30色)は、  
藝大アートプラザのみで販売中。  
問合せ先／藝大アートプラザ  
東京都台東区上野公園内12-8  
東京藝術大学内  
TEL 050(5525)2102

**holbein**

ホルベイン工業株式会社  
東京都豊島区東池袋2-18-4  
TEL.03(3983)9251  
大阪府東大阪市上小阪1-3-20  
TEL.06(6723)1554  
[www.holbein-works.co.jp](http://www.holbein-works.co.jp)

◎「油一」が、2007年度グッドデザイン賞を受賞しました。



# 山本直彰

再びドアへ。ここからあそこへ  
横山勝彦＝文 森田兼次＝写真[＊]



I972

「当時、日本画をやることは格好悪いこと。  
そのことにもがき苦しんでいました」



歩行者天国 1973  
麻紙に膠、岩絵具、箔  
181.8×273.3cm  
卒業制作／愛知県立芸術大学蔵

すでに秋も終わり、だが冬と言ふには暖かな一日、藤沢にある山本直彰のアトリエを訪ねた。これまで描いた作品がぎっしりと保管されているのは当然として、部屋の隅に立てかけられた木のドアが眼に入った。かつて繰り返し使った素材を、まもなく始まる個展のために、再び手がけようとしているのだ。

1950年、横浜に生まれた山本直彰は、高校の時に見た「厚塗りの日本画の、油絵みたいな色彩」に惹かれ、大学では日本画を選んだ。日本画科は技術の伝授が多いため、師弟関係が強い。「とんでもないところに入つた」とも思ったが、大学院修了までを過ごす。そして、「学校の主流からは外れ」て、新制作展に出品。74年には新制作協会から日本画部が独立し、創画会となる。

はじめ人物画を描いていた山本の作品が急激に変化するのは92年、1年間プラハに滞在してからだ。ソビエト、そして社会主義が崩壊し、抑圧されていた東欧の美術家たちが一挙に社会の前面に出始めていた。そ



DOOR EX 1998 パネル、合成繊維キャンバスに岩絵具、樹脂膠 361×417.5cm (10枚組) 練馬区立美術館寄託作品

「ドアそのものを使った作品に代わり、  
今度は紙の上で、それに匹敵する強い絵を描こうと……」 *I998*

ここには、バブル経済に浮かれる日本から見れば、まったく異なる厳しい現実があった。その現実のなかで「人間」を描こうと考え、プラハには画材をまったく持つていかなかつた。しかし現地の画材店には画材がない。学生たちは粗末なクラフト紙に、焼いた木のかけらで等身大に人体を描いていた。(そこまでして絵を描くのか)と思った。すでに40歳を過ぎていたが、本当に絵を描くとはどういうことなのかと考え、「ずつりとした責任」から、(ここでは描けない)とすら感じた。

ある時、家のドアが開かないことがあり、それまで意識しなかつたその存在について考えた。路上に捨ててあつた大きな木製ドアを拾い、そこで後半から、いわゆる現代美術とし

こには、バブル経済に浮かれる日本から見れば、まったく異なる厳しい現実があった。その現実のなかで「人間」を描こうと考え、プラハには画材をまったく持つていかなかつた。しかし現地の画材店には画材がない。学生たちは粗末なクラフト紙に、焼いた木のかけらで等身大に人体を描いていた。(そこまでして絵を描くのか)と思った。すでに40歳を過ぎていたが、本当に絵を描くとはどういうことなのかと考え、「ずつりとした責任」から、(ここでは描けない)とすら感じた。

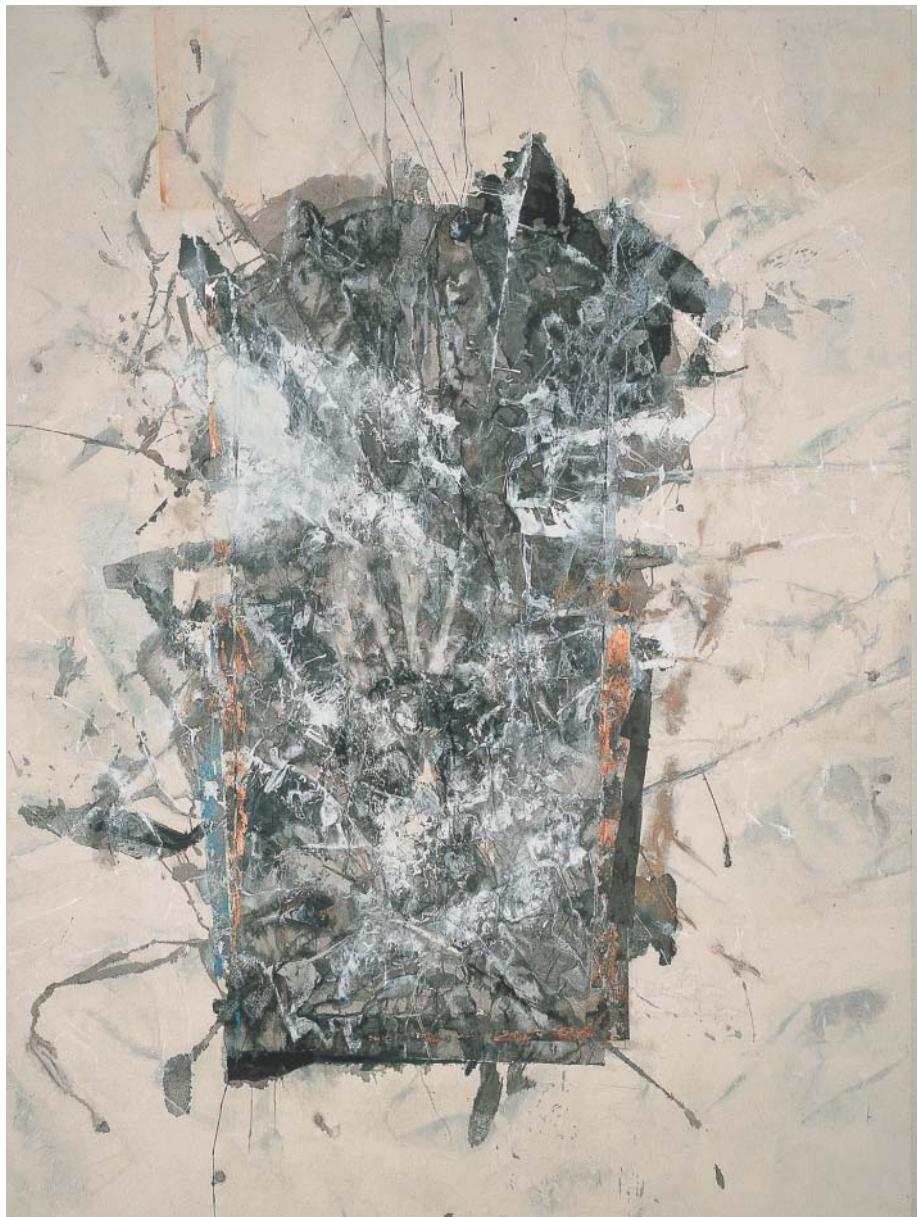
帰国後、1996年に神奈川県民ホールで個展を開催する。ドアを使った作品の集大成としての意味があつた。翌年、創画会会員となり、今度は紙の上でドアに匹敵する強い絵を描きたいと思った。この頃、90年

こに「描かなければならぬ」とさえ感じた。ここからあそこに行くには、ドアを通らなければならないのだ。山本は、「ドア自体に描くことは、人間の肉体に描くことだと思つたんですね」と言う。ドアに自画像を描き、さらに自己否定の「×」が重なった。

過去にもドアをモチーフとして描いていたが、支持体にした作品が生まれるのは、このプラハ時代からである。18点描いた。「本気だった」。



共和国広場II 1993 179×72.5cm  
木扉に膠、岩絵具、インク、アクリル  
絵具



右—IKAROS 2001 2001 麻紙に樹脂膠、岩絵具、箔 291×145.5cm

左—Memento mori 2007 白麻紙に岩絵具、箔、樹脂膠 269.1×201cm

ともに撮影=末正貞礼生  
写真提供=コバヤシ画廊

ての日本画が注目されるようになり、各地の美術館で日本画の新傾向を紹介する展覧会が開催された。山本直彰もこの動向のなかで注目を集めしていく。しかしプラハに行つた時点で、「日本画ではなく、絵画だ」と思って描いていた山本にとつて

は、日本画に現代性などないと批判されていた時代を思い出しながら、「日本画もここまできたのか」と感慨を抱く一方で、同時にプラハでの体験を今後の制作にどう生かすかが課題となっていた。

その思いは、『イカロス』と名づけられた作品群として、2000年頃から5年間ほど続く。すでに86年にものギリシア神話に登場する失墜した人物を題材にしたが、この時は画面下方に原子力発電所を描いた。時を経て取り組んだイカロスでは、強烈な落下のイメージ、「美とは痛みである」という感覚を描きたかったのだと言う。作品の評価は高まり、展覧会に招待されることも増えたが、模索は続く。

かつて漫画家の故・横山隆一を訪ねた時、「君は人間を相手にせず、宇宙人に向かって描け」と諭されたことの意味を考えた。これまで、画家として全力で描こうとしてきたが、小さな自我に閉ざされていたのではないかと疑問を持ち、むしろ自己意識を捨て、自然の大きな力のなか



上——個展「天にかけて誓うな」(2007年11月28日～12月18日、東京日本橋高島屋美術画廊X)に向けて制作中のアトリエにて

下——高台に位置するアトリエは木枯らしにさらされ、キリストが磔刑に処せられたゴルゴダも想わせた [ともに\*]

やまもと・な おあき 1950年神奈川県生まれ。75年愛知県立芸術大学大学院修了。97年から2007年まで創画会に属し、87、89、96、97年に創画会賞を受賞。92～93年には文化庁芸術家在外派遣研修員としてチェコ、プラハで制作。個展に86年ギャラリーイツ(東京、90～92、94～02年も)、93年プラハ国立ナープレステック博物館、96年神奈川県立県民ホールギャラリー、98年コバヤシ画廊(東京、99、01、03、04、06、07年も)など。グループ展に92年「現代の日本画 NEW VOICE」展(ノース・ダコタ美術館、アメリカほか)、01～05年「椿会展」(資生堂ギャラリー、東京)、03年「現代の日本画—その冒險者たち」(岡崎市美術博物館、愛知)、04年「超日本画宣言—それは、かつて日本画と呼ばれていた」(練馬区立美術館)、05年「META展II」(神奈川県立県民ホールギャラリー、07年も)、06年「現代日本画の展望」(和歌山県立近代美術館)、07年「上田コレクション—それでも人は『境界』を超える」(練馬区立美術館)ほか。1月28日まで国立新美術館(東京)で開催中の「旅」展—異文化との出会い、そして対話に出品。

で作品が現れるのを待とうと思つて意識していたが、墨を使ったモノトーンの絵画、水墨画を自覚した。もちろん山本にとって過去の伝統は、いわば作家としての自分を定位するための座標にすぎない。「現在、水墨のすべてが写されているように見えた。ドアに描いた時は伝統的な板絵で描くのは、水墨画を描くことでは

「ピエタ」を、あらためてテーマとした。今度は画面に自然にかたちが戻ってきた。再び描き始めたのだ。

このように、山本直彰は常にいくつの作品シリーズを並行して制作している。かつて描いた題材が何度も蘇り、その都度、新たな相貌で強度を増す。画面上の変貌は一見目まぐるしいが、画家であろうとする意識は一貫して揺るがない。彼は作品を製造しているのではなく、絵画を制作している。このような意味で、彼の生活すべてが絵画を制作するためにあるのだ。

年末に開かれた個展では、マタイ福音書にあるイエスの言葉「天にかけて誓うな」をタイトルにした。再び作品に使用したドアは、人の前に立ちはだかるものではなく、開けて中に入ることのできる希望のドアである。「絵を描くことは、絵と一緒に生きていくこと」と語る山本直彰は、今そのドアを開こうとしている。

◎よこやま・かつひこ[練馬区立美術館学芸員]  
11月11日、神奈川・藤沢の作家アトリエにて  
取材

10年を超える時間の隔たりは大きく、人間関係も変化した。人物を描つてチエコ人のモデルを使って描いた